

城北信用金庫所属のアスリート 職員の原点を知る

# ATHLETES ZERO

limited edition  
[アスリートゼロリミテッドエディション]

vol.4

## 山田美諭

スポットインタビュー

「世界一を目指す」



初音小路(荒川区日暮里)

ATHLETES ZERO limited edition vol.4 2018年11月発行

photographs by Aiko Kawabe / designed by Megumi Imano / directed by Hiraka Hoshino



城北信用金庫は、  
所属するアスリートを紹介して、  
スポーツの万能性への  
理解を深めることで、  
より豊かな社会づくりを  
目指します。

Webにて公開中

ATHLETES ZERO

アスリート職員による、日々の出来事や成長をつづったブログ等をご覧ください



Johoku Athletes Club

特設Webサイトにて、アスリート職員の活動報告をご覧ください



JOHOKU SHINKIN BANK

# 世界一を目指す

普段のおっとりとした雰囲気や華奢な見た目からは想像しがたいが、ひとたび試合となると表情が一変。全日本テコンドー選手権では7度の優勝経験を持つ超実力派。そんな山田選手の背景にはどんなストーリーがあるのか――。



## テコンドー 山田美諭

PROFILE

Miyu Yamada

1993年12月13日生まれ O型 愛知県出身

【戦績】2018年全日本テコンドー選手権大会 -49kg級 ... 優勝  
2018年アジア競技大会 -49kg級 ..... 3位

1993年12月13日に愛知県で格闘技道場を営む両親のもとに生まれたみゆちゃん。いつもお兄ちゃんの後ろをついて回る引っこ込み思案な女の子。同世代の友達より近所のおばあちゃんやおじいちゃんとお話の方が好きだった。そんな少女が格闘技を始めたのは3歳の時だった。

### 類まれな才能と 競技への強い思い

「兄の空手の試合を見に行くうちに自然とやりたいと思ったんです。小さかったので、家と道場の切り替えができず、父をいつもの癖で『おとう』と呼んでよく怒られていました」

家と道場は目と鼻の先。駐車場を挟んですぐ隣にある道場に通うのが日課だった。ほかにもテニス、水泳、習字、ピアノ、学習塾などのたくさんのお習い事



当時8歳。あどけない姿とは裏腹に鋭い蹴りを決める。

をしていたが、やはり空手が一番彼女に合っていた。  
「中学1年生の時、父の勧めでテコンドーをはじめました。最初のうちは空手と並行して週1回の練習だけでしたが、だんだんとテコンドーの方に比重が傾いていきました」

頭角を現すまでに時間はかからなかった。中学1年生の時に全日本ジュニアテコンドー選手権大会に出場し、3年生で初優勝を飾った。高校2年生になるとシニアの全日本テコンドー選手権大会でも優勝。国内では敵なしのトップ選手に急成長し、日本代表として海外の試合にも出場するようになる。順風満帆と思われた彼女だったが――。

「高校生の時はテコンドーを辞めたくて仕方がなくて。親にあれこれ言われるのが嫌でした。競技に影響するからといって恋愛も禁止されていました。当時はぶつかることも多かったけど、テコンドーが大好きだったから踏みとどまりました」

### 勝つことを諦めない 恩師の喝で目覚めた本気

高校卒業後はテコンドーの名門、大東文化大学に進学する。そこで恩師である金井洋監督から指導を受けることになる。

「国内の試合は勝てるけど、海外の試合になると全く歯が立

ちませんでした。勝つのはいつも海外の強い選手。周りには五輪で金メダルをとることを目標にしていると言っていました。どこかで日本人選手は頑張っても勝てないんじゃないかっていう諦めがいつもありました」

そんな気持ちを透かした監督は彼女を一喝する。  
「監督に自主練習を休みたいと言ったら『お前は本気で五輪で金メダルを獲ることを目指しているか？』って。グサグサ突き刺さりました」

彼女の負けず嫌いな性格を知る監督だからこそその厳しい言葉。その狙い通り、闘志に火のついた彼女の練習態度は一変する。

「監督を見返したいという気持ちが強かった。それまではためらっていた男子選手との組手も積極的にやりました。この頃から本気で五輪で金を獲ることを目指すようになりました」

### 絶対王者の挫折 苦しみを乗り越え得たもの

大学卒業後も働きながら競技を続ける決意を固め、城北信用金庫への入庫を控えた大学生最後の冬――。

「リオ五輪の代表選手を決める絶対に負けられない大会でした。足技を入れようとして、パランスを崩して転倒。その時に

足の靭帯を切ってしまいました。痛みを我慢してなんとか立ち上がった試合を続けたけれど、当然足に力が入らず、その後は試合になりませんでした」

優勝を期待された中でのまさかの2回戦敗退。込み上げる悔しさに、涙が止まらなかった。

「手術を伴う大怪我をしたのはこの時が初めて。社会人になってからは、午前に仕事をし、午後はリハビリとトレーニングの見学。仲間の頑張る姿を見ていただけで何もできない自分が本当に悔しかった」

トップを走り続けた彼女が感じた、初めての焦りだった。地道なりハビリを続け、怪我を克

## 「怪我で苦しんだ一年は、テコンドーが大好きなんだと教えてくれた。」



'17年全日本選手権大会優勝。完全復帰を果たした。

怪我を経験し肉体的、精神的にも成長した彼女はリハビリ期間をこう振り返る。  
「日本代表として海外の試合に出させてもらえることの有難みを改めて感じました。私が出ることによって出られない選手もいる。今いる環境は当たり前じゃないことに怪我をしたから気づけました」

### 国際大会での初メダル 見えてきた今後の展望

快進撃は続く。2018年1月に行われた全日本選手権大会では7度目の優勝を果たし、9月に行われたアジア競技大会では3位入賞。自身初となる国際



並みいる強豪を抑え、国際大会で銅メダルを獲得。

大会でのメダルを勝ち取った。  
「今まで海外の試合はせいぜい5位止まり。今回は初戦から決勝戦のつもりで全力を出しました。メダルが確定した時は嬉しかったけど、同時に金を狙いに行っただけです。だから準決勝で負けた時は悔しかった」  
今回は惜しくも優勝を逃したが、確実に世界の頂点に近づいている。今後の目標を尋ねると力強い答えが返ってきた。

「2020年の東京五輪で金メダルを獲ること。国内では一番でい続けることが大前提だけど、出場だけでは終わりたいなと思っています。五輪はみんなが注目する特別な大会。テコンドーは日本ではマイナーなスポーツなので、私を通してもっと多くの人にテコンドーの魅力を知って欲しいです」

確かな実力と周囲の期待を胸に山田選手は次なる戦いに挑む。